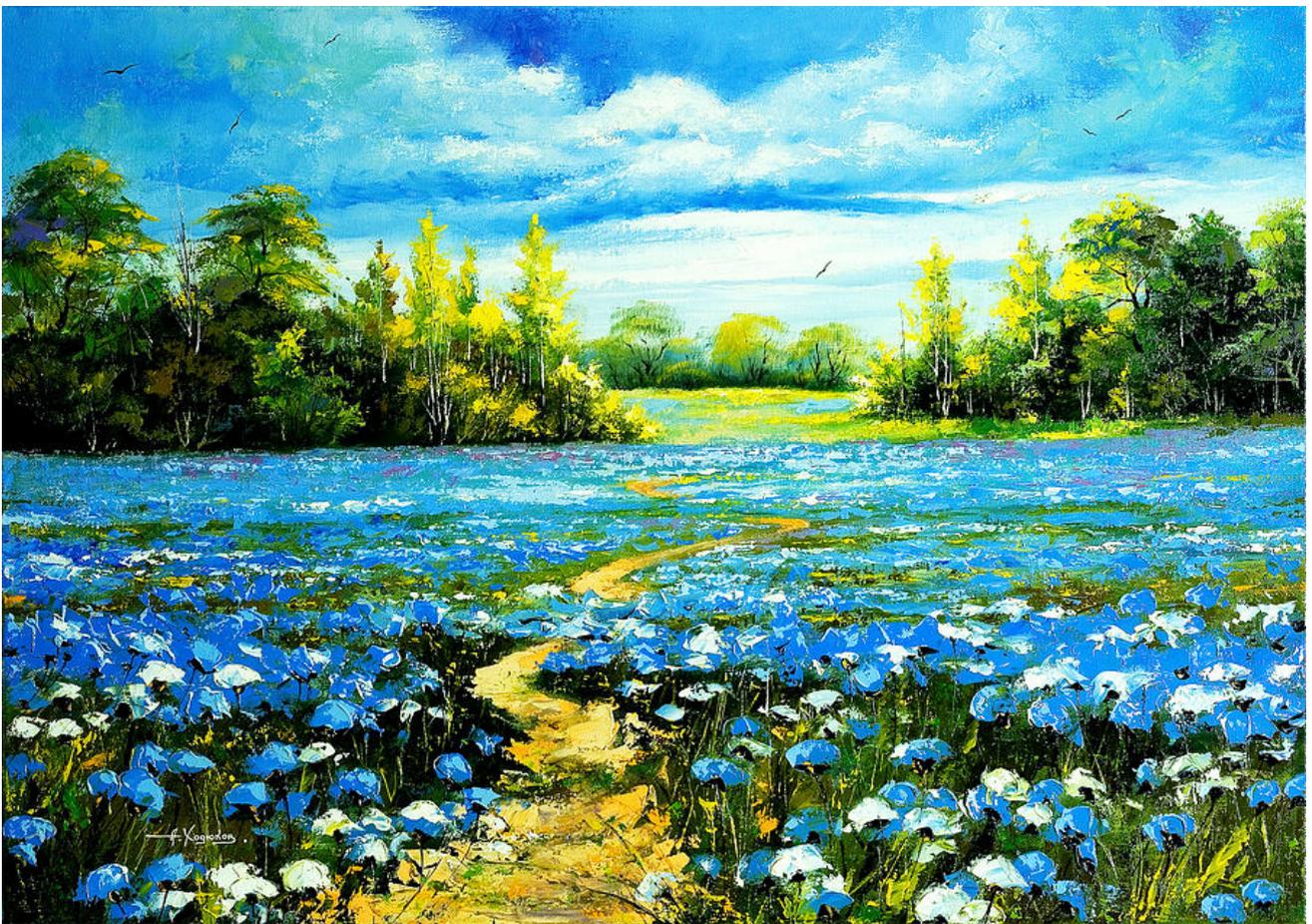

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 21

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 401.「道」:サスキア・クネン先生との出会いと再会
- 402.純有機的な時の流れの中で
- 403.熟達者が持つ独特のリズム:「ピンクノイズ」について
- 404.繰り返しと準備
- 405.世界で進行する「卓越性開発ゲーム」
- 406.科学的な言語と哲学的な言語
- 407.所属プログラム内の興味深い研究プロジェクト
- 408.昇り出る太陽と沈みゆく太陽
- 409.何気ない日常から
- 410.学習や実践に最適な「ノイズ」を生み出すために
- 411.オランダ語のテストより
- 412.知識の重要性について
- 413.言語世界の階層性
- 414.知識を活用する実践力
- 415.知識体系の素材
- 416.レンガ造りの家々より
- 417.虹と仕事
- 418.変化の裸体
- 419.サスキア・クネン教授との二回目のミーティング
- 420.今後のオランダ語の学習について

401. 「道」: サスキア・クネン先生との出会いと再会

峠は決定をしようところだ。峠には決別のためのあかるい憂愁が流れている。峠路（とうげみち）をのぼりつめた者は、のしかかってくる天碧（てんぺき）に身をさらし、やがてそれを背にする。

風景はそこで綴じあっているが、ひとつを失うことなしに、別個の風景に入ってゆけない。大きな喪失に耐えてのみ、新しい世界が開ける。

峠に立つ時、すぎ来し道はなつかしく、開ける道はたのしい。道はこたえない。道は限り無くさそうばかりだ。

詩人真壁仁「峠」より

今日は午前中に、私の論文アドバイザーであるサスキア・クネン先生の研究室を訪れた。クネン先生との最初の出会いはかれこれ八ヶ月前のことである。今このようにして自分がクネン先生の研究室で話をしていることが不思議に思えてくる。

あれは三年前のことだろうか。ハーバード大学教育大学院に在籍していたカート・フィッシャー教授の研究室を訪れ、後日改めてフィッシャー先生とメールでやり取りさせていただいた時に、フローニンゲン大学とそこに在籍するポール・ヴァン・ギアート教授の名前を覚えてもらったのだ。

当時の私は、フィッシャー先生の下で探究を進めたいと思っていたが、ポール・ヴァン・ギアート教授の論文を読んだ瞬間に、自分はまず最初にフローニンゲン大学に行く必要がある、と直感的に感じたのである。あの時の私はニューヨークに住んでおり、ボストンは非常に近く、今度の引っ越しは距離的に楽なものになりそうだと思っていた。

しかし、私は結局ボストンで生活を始めることなく、フィッシャー先生のところへ訪問した後は、ロサンゼルス、東京、フローニンゲンとどんどん西へ移動していくことになった。地球を西回りする形で人間の発達について探究を続けた結果、もしかしたら再び米国東海岸へ戻る日が来るかもしれないと思う。

フィッシャー先生とのやり取りの後、私は間髪を入れずポール・ヴァン・ギアート教授に連絡をした。すると、ヴァン・ギアート教授はちょうど学術世界から公式的に引退したということであり、長らく一緒に仕事を続けてきたサスキア・クネン先生を紹介してくださったのだ。

それ以降、私はヴァン・ギアート教授とクネン先生の論文をひたすら読むような生活になり、読めば読むほど、自分の次の行き先はオランダのフローニンゲン大学だという思いが増す一方であった。今、自分の手元にある論文の一つには、コーヒーの小さなシミが付いている。このシミは、ロサンゼルススターバックスで熱心に論文を読んでいる最中に付いたものだ、ということをもと思い出した。

それを思い出した私は、今こうしてフローニンゲンにいる。ここまでの道のりは平坦なものではなく、実際に私は、ロサンゼルス在住中に一度、東京在住中に一度、合計二回ほどフローニンゲン大学から不合格通知を受けている。二回目の不合格通知を受けた後、引き下がるという選択肢が私の中には一切なかったのだ。そのため、不合格理由の最大のものであった統計学の知識と技術をなんとか独学で高め、英国ケンブリッジ大学に足を運んで統計学とプログラミング言語Rに関する集中的なトレーニングを受けることにしたのだ。

ケンブリッジ大学の図書館で思いがけない偶然に遭遇したことを今でも鮮明に覚えている。図書館で何気なく手に取った発達心理学に関する論文誌を開いた瞬間に、クネン先生の論文が掲載されていたのだ。これは驚くべき偶然であった。その後、イギリスからオランダに移動し、フローニンゲン大学のクネン先生の研究室を訪れたのが今から八ヶ月前の出来事なのである。そして、今日私は、クネン先生との再会を果たすことになったのだ。

私:「クネン先生、おはようございます。」

クネン先生:「あら、ヨウヘイ。久しぶりね、どうぞここに座って。」

私:「ありがとうございます。」

クネン先生:「ついに来たわね(笑)。ようこそ！」

私:「ええ、ついに来ましたよ(笑)。ここに来て光栄に思います。」

クネン先生との八ヶ月ぶりの再会を果たし、まずはお互いの近況報告などをしていった。特に、私が話を伺いたかったのは、クネン先生が参加した、スペインで先週に開催された学会についてだった。クネン先生も発表者の一人として登壇し、私は発表資料を先週末に見ていたため、発表に対する他の研究者たちの反応を含めて興味があったのだ。

私:「そういえば、スペインでの学会はいかがでしたか？」

クネン先生:「ええ、素晴らしかったわ。」

私:「先生の発表資料を見ましたが、ダイナミックシステムアプローチに関する他の研究者の反応はどうでしたか？」

クネン先生:「おかげさまですごく好評だったわ。実際に、私の発表に数多くの研究者が詰めかけてくれて、いろんなやりとりをすることができたの。発達現象を研究する者にとって、変化のプロセスをいかに捉えていくかにみんな関心を持っているようで、とても好評な発表だったわ。」

私:「それは素晴らしいですね。僕はてっきり、欧州の発達研究者の中ではすでにダイナミックシステムアプローチは非常に馴染みのあるものだと思っていたのですが。」

クネン先生:「確かにポール(ヴァン・ギアート)は三十年以上も前にダイナミックシステムアプローチに着目しており、私も彼とかれこれ二十年以上も一緒に仕事をしてきたけど、ダイナミックシステムアプローチが発達科学者に注目され始めたのは比較的最近のことだし、まだまだこれからの分野ね。それを今回の学会でも感じたわ。」

私もヴァン・ギアート教授の論文を時代を遡りながら読み進めることによって、ヴァン・ギアート教授がダイナミックシステムアプローチに三十年以上も前から着目していたことに驚かされたのであるが、

三十年経った今になって、ようやく少数の発達科学者が本腰を入れてこのアプローチを活用し始めているのだという現状に少なからず驚かされた。クネン先生曰く、やはりダイナミックシステムアプローチに不可欠の数学的素養に関するハードルが、発達科学におけるこの分野の進展に影響を与えていたそうである。

こうした雑談の後、本題の私の研究論文に話が移った。今回の論文は学位取得のためだけで終わらせるのではなく、この論文の内容を元に査読付き論文としてどこかのジャーナルに投稿したい、という旨をクネン先生に伝えた。すると有り難いことに、もちろん分析結果によりけりだが、私を筆頭著者に据え、クネン先生が第二著者として共著論文にして行こう、という提案をしてくださった。確かに、ジョン・エフ・ケネディ大学の大学院に在籍していた時にも、ある書籍の一つの章を自分の論文に当ててもらったが、その論文の質は今から見ると非常にお粗末なものであり、今回の論文にかける意気込みは強い。

発達科学におけるダイナミックシステムアプローチの領域を引っ張る第一人者から薫陶を受ける日を三年間も待っていたのだ。過ぎた道を振り返ると、それは長く険しいものであったが、同時に懐かしさもある。

そして、これから開ける道はいかなる困難や障壁があろうとも、私にとって充実したものになるだろう。いずれにせよ、過ぎ去った道やこれから訪れる道そのものに目を奪われるのではなく、道に自己を委ね、道そのものとして生き続けていくことが大切なのだろう。2016/9/26

402. 純有機的な時の流れの中で

クネン先生とのミーティングの後、自宅に戻って昼食をとり、いつものように20分ほど仮眠をとった。その日の自分の状態によって、仮眠中に起こる現象も様々であるから、観察対象としては事欠かない。自分の身体エネルギーが白色かかった黄色い電流と共に一挙に活性化される現象は、一ヶ月に数回ほど訪れる。

この現象も実に特徴的なのだが、本日はそれとは一風趣の異なる現象を体験した。今日は仮眠から目覚める瞬間に、時間と場所の感覚が喪失し、この世界における自己の立脚点を定めてから再

び日常世界に戻ることを迫られる、というような体験であった。常軌を逸した電流が身体に流れ込む体験と比べると、こちらの体験の方が頻度が高い。

この体験を経ると、仮眠中の意識のない自己の存在について考えを巡らせる、という作業が決まって生じる。この問題は、意識の有無と存在の有無に関するテーマと密接に関わっているため、取り掛かるのが非常に厄介である。実際に、今日もその問題に関してほとんど進展を見せず、窓から外の景色をぼんやりと眺めながら、無意識の領域に入り込んだ自己の存在について、その問題の外縁をなぞるように自分の考えがゆっくりと動いていた。

思考の旋回がひと段落着いたところで、何気なく、先日知り合った日本人の知人の方が今度話題として取り上げようと言っていた「バーンアウト(燃え尽き症候群)」について考えが飛び移っていた。日本において、バーンアウトの問題は、教育やスポーツ、そして企業社会などの様々な領域で目につく。

過度な詰め込み教育、過剰なトレーニング、異常なまでの労働時間などが引き金となって、様々な領域の多様な世代の中でバーンアウト現象が見られる。これは一つの大きな社会問題だと思う。その方曰く、バーンアウトを一度経験してしまうと、元の状態に回復するのは極めて難しいそうである。

オランダでは、社会が一体となって、バーンアウトを人々に引き起こさないようにする思想と仕組みが存在している、ということを教えてもらい、日本社会と対比する形で今度ディスカッションをしよう、ということになっていた。

個人の発達や社会の発達について考えてみたとき、この問題は実に重要なテーマだろう。そのため、私の方でも少しずつこのテーマについて考えを深めていきたいと思う。オランダでの生活はまだ二ヶ月に満たないが、個人的な経験として、日本社会を取り囲む「時」の感覚質とオランダ社会を取り囲む「時」の感覚質が歴然と異なることは、この国に到着してすぐに気づいた。

オランダでは時間の流れの中に人工的な匂いがほとんどなく、純有機的に時が流れているのを感じるのだ。東京にいた時を振り返ってみると、東京でも純有機的な時の流れを感じることはできたのだが、その層にたどり着くまでにこちら側の意図的な努力が必要となるのである。

時間を無理に早めようとする人工的な時間装置を特定し、その装置の動きをこちら側が意識的に止めなければ純有機的な時の流れに入っていけないのが、東京にいた時の私の偽らざる感覚であった。私たちの時間を強引に進めようとした時間装置の構成要素は多様だと考えており、今のところ何がそれらに該当するのかは定かではない。とにかく、そうした時間装置が存在しており、着色料の添加された時間を生み出しているという感覚に変わりはない。

フローニンゲン大学のプログラムが開始してすぐの頃、履修するべきコースの量が少ないのではないかと、思っていた。つまり、なぜこんなに一週間のスケジュールに余裕があるのか疑問だったのである。これならば二つの修士プログラムを同時に進めていくことも十分可能ではないか、と思ったほどである。

しかしすぐに気づいたのは、この背景にはオランダ社会が持つ独特のゆとり感覚の中で、私たちに密度の濃い学習を行うことを後押しする配慮が存在するのではないか、ということだった。純有機的な時の流れの中で、各々が各自の関心事項に沿って思う存分に探究活動に励むことを促す風土は、どこか日本の旧制高校のような雰囲気をおぼわす。

私にとって、時がこのような濃い密度で有機的に流れることを味わうのは初めての経験であった。そうした時間感覚の中で自分の探究に取り組めることはとても贅沢なことであるため、それを深く味わうことが重要だろう。そのため、ここで流れる時の中に不要なものを無理に詰め込みすぎないようにしようと思ったのだ。

東京で流れていた時間とフローニンゲンで流れる時間は歴然と異なったものとして知覚され、これは見間違えようのないものであるし、感じられないはずのない差である。確かに、内側に流れる固有の時間に加え、外側に流れる時間が存在することは事実である。実は外側の時間にも様々な種類があり、それは外部環境と不可分に結びつく集合意識の時間感覚と密接に関係しあっているように思うのだ。

今私が感じている時間感覚は、私自身の内側の固有な時間感覚であるのと同時に、オランダという国が生み出す集合的な時間感覚でもあると思うのだ。このような純有機的な時間の流れがこの世

界に存在するという事実は、学術探究の深度を左右する云々という話ではなく、人間の生き方そのものを根底から考えさせる類の話だと思うのだ。

403. 熟達者が持つ独特のリズム:「ピンクノイズ」について

流れてくる音楽に耳をすませていると、そこには固有のリズムがあることに気づく。ランダムで再生しているはずのピアノ曲は、それらが全て一つのリズムの中で奏でられているような気がするの不思議である。

自分の日常も長短を織り交ぜた波がうねりながらも、それはそれとして一つの固有のリズムを持っている。フローニンゲンという街に降り立ってからの二ヶ月間の日々を微視的に眺めると、日々の中の私の精神状態と身体状態は、間違いなく様々な幅を持った波として動いている。一方、巨視的に眺めてみると、それは一つの固有のリズムを持った波として躍動しているように思える。

前々から気になっていたのであるが、ある領域における熟達者は何やら独特のリズムを持っているのではないだろうか。対象領域は武道でもいいし、芸術の世界でも何でもいい。その道で一流とされる熟達者は、初心者とは性質がまるっきり異なる独特のリズムを持って実践活動に従事しているのではないかと、思わされたことはないだろうか。

私はこれまでの経験上、スポーツの領域のみならず、独特な思考運動を展開している優れた知性を持つ人たちを目の当たりにしてきた。彼らが実践の際に発揮するリズムは非常に独特であり、その道の初心者が真似をしようと思っても真似できない代物である。今年の夏に行われたリオ五輪においても、一流のアスリートたちが、私たちとは異なる独特のリズムを持って競技に臨んでいるのを目撃した方も多いのではないだろうか。

このような問題意識を持っていたところ、私の良きメンターであるルート・ハータイ教授を筆頭著者とする論文“Pink noise in rowing ergometer performance and the role of skill level (2016)”の中に大変興味深い研究結果が報告されていた。この論文は、一流のボート選手と初心者の技術の発揮のさせ方の違いに焦点を当てている。

この論文で何が注目に値するかというと、私が感じていたことと同様に、一流のボート選手は能力の発揮のさせ方が独特なのだ。どのような意味で独特かというと、この論文によれば、一流のボート選手は能力を発揮する時に「ピンクノイズ」と呼ばれるものを生み出しているのだ。

「ノイズ」と言ってもこれは何か特殊な音を出しているわけではもちろんなく、ノイズというのは能力の変動性のことを指す。私たちは何かの能力を発揮する時、その変動性のパターンは大きく三つに分けられる。一つ目は、「ホワイトノイズ」と呼ばれるものである。これは、能力を発揮する際の変動性が最も高く、一定時間において能力を発揮する時に、常にその能力レベルが乱高下しているようなイメージである。

二つ目は、「ブラウンノイズ」と呼ばれるものである。これは先ほどのホワイトノイズとは真逆であり、能力を発揮する際の変動性が最も小さい。言い換えると、一定時間において能力を発揮する際に、能力の発動のさせ方に変化が乏しく、極度に安定的なのである。

三つ目は、「ピンクノイズ」と呼ばれるものである。これはホワイトノイズとブラウンノイズのちょうど中間に位置し、能力の変動が激しすぎもせず、安定的すぎもしないというものである。

この論文で明らかになったのは、ボート競技の初心者は能力の乱高下が激しく、ホワイトノイズを生み出し、一流のボート選手は程よい変動性と安定性を持ったピンクノイズを生み出す、ということである。この論文の調査結果を見ると、初心者は変動性の激しいホワイトノイズしか生み出さず、ブラウンノイズを生み出してはいなかった。おそらく初心者が何か実践をする際は、常に試行錯誤の状態で失敗と成功の入れ替わりが激しいため、ホワイトノイズが検出されたのだと思う。

仮に私たちが全く条件を変えず、自分なりの工夫を凝らすことなく、単調な反復練習をするときなどにはブラウンノイズが検出されるのかもしれない。いずれにせよ興味深いのは、一流の実践者がピンクノイズを発揮するという事だろう。様々なことが考えられるだろうが、その道の熟達者は、置かれている文脈や環境が変化に激しいものであれば、その変動性を抑えるように安定的な波を内側で作り出し、波が激しすぎないように調節するような能力を持っているように思える。

一方、熟達者は単調な反復練習をする際にも、自分なりの工夫を凝らしながら、能力の発揮のさせ方にあえて変動性を持たせるようにしているのではないか、ということが推測される。一流の熟達者

のパフォーマンスから感じていたある種の独特なリズムの正体は、こうしたピンクノイズにあるのかもしれない。

404. 繰り返しと準備

今朝からいよいよ通学時の気温が10度を下回った。まだ10月に入っていないにもかかわらず、早朝の気温がここまで下がり始めたのかと驚いた。確かに辺りを見渡すと、もはや半袖で生活をしている人はほとんど見かけない。しかし、それでも私は10月までは半袖で乗り切ろうと思い、今日のオランダ語のクラスに向かう際にも、上に羽織るものを何も持参しなかった。

早朝の気温は間違いなく低いのであるが、それほど寒さを感じることなく、語学センターへと向かった。私がフローニンゲンに到着してからずっと工事を続けていたクラネヴェ通りの舗装作業もいよいよ終盤に差し掛かっていることに気づいた。私が見ていないところで着実に舗装作業が進行し、ついに完成を迎える様子を見るにつけて、一つの作業を毎日継続させていくことの意義を実感する。

この工事のおかげで、クラネヴェ通りは必ずや市民にとってより快適な道となるだろう。仮に私たちが、この工事を毎日着実に進めていた労働者の顔や名前を知らなくても、私たちの目には見えないうところで着実に行われていた彼らの仕事によって、街の市民は多大な恩恵を授かることになる、と確信した。そのような思いを抱きながら、クラネヴェ通りを通り抜け、語学センターに到着した。

今日はアイルランド人のドーナと席が隣であった。私はドーナと出会うまで、アイルランドの公用語ははっきり英語だと思っていたのだが、どうやらアイルランド語というものがあるらしい。確かに現代のアイルランド人は英語を母語として使用しているそうだが、それでもアイルランド語を使用している人もまだ残っているそうなのだ。

ドーナにより詳しく話を聞くと、歴史的にアイルランド語は被支配民の言語とされており、現代においては、英語の支配力によって絶滅寸前の言語になりつつあるということである。これは私の推測だが、やはり国としてアイルランド語をどのように保護していくか、そして英語をどのように取り入れていくかについてアイルランド国内で様々な議論が起こっているのだと思う。

ドーナ自身は、言語学修士課程の中のマルチリンガルプログラムに在籍している。中国人の友人のシェンは、ヨーロッパ言語を音韻論・形態論・統語論などの多様な観点から解析していくことを専門としており、ドーナの専門は、国家としてどのように母国語を守りながら他の言語を取り入れていくのか、などの政策的な観点から言語を捉えていくことにあるそうだ。アイルランドという国で育ったことと彼女の専門は密接に関係しているのだろう、と推測された。

ドーナの話聞きながらクラスメートを改めて眺めてみると、このオランダ語のクラスの履修者の中で、誰一人として英語を単一の母国語としている者がいないことに気づいたのだ—アイルランド人のドーナにはアイルランド語があるし、インド人のブハーブナにもヒンディー語がある—。これは面白い光景だと思ったし、英語が独裁的な言語になりつつある現代社会を踏まえてみると、英語以外の言語を今に生きる私たちが学んでいくことは、後々の人類に何か貴重なものを手渡すことにつながるのではないか、と思わされた。

そして第七回目のオランダ語のクラスが開始された。今日のクラスではまず最初に、前回の宿題である「どこかのカフェかレストランに行き、オランダ語で何かを注文してみる」ということの振り返りから始まった。リセットの質問に対し、他のクラスメートたちは一様にオランダ語で一言述べた後に、その時の状況や結果について英語で説明をし始めた。

私はリセットからの質問を事前に想定し、その回答をテキストに書き込み、今朝もそれも口に出して言ってみるという準備をしていたため、三つのセンテンスを全てオランダ語で言い切ることができた。私にできることは、習ったことを人一倍繰り返すことであり、入念な準備しかない、と常に自分に言い聞かせている。繰り返しと準備を怠った場合、自分が何もできないことを誰よりも理解しているのだ。

そして、丹念な繰り返しと入念な準備によって、自分の中で望ましいリズムが生み出されていくことを知っている。今日のクラスは完全に自分のリズムで終始進んでいったと思う。自分の学習姿勢の中に、ダイナミックシステム理論で言う「自己強化型システム」が構築されていることに気づく。

すなわち、丹念な繰り返しと入念な準備をすればするほど、強い自己効力感を持って学習を継続することができ、学習の成果がより高まっていく。同時に、学習の成果が高まれば高まるほど、より自

己効力感が増し、丹念な繰り返しと入念な準備に自己をよりいっそう駆り立てていく。このようなポジティブフィードバックが自分の内側で回っていることを確かに実感する。

いかなる学習領域や実践領域においても、このような自己強化型システムを自分の中で構築していくことは、学習の進度や定着度に好影響を及ぼすと思う。私も時に、丹念な繰り返しと入念な準備を怠り、リズムを崩すことがあるので、そうした局面を極力減らし、絶えず自分のリズムで学習や実践を継続させていきたいと思う。あるいは、仮にリズムが崩れた場合であっても、そこからの回復速度を速めるような工夫を行いたいものである。

今週の金曜日にはこれまでの学習内容の定着を試す中間試験があり、それが終わればクラスメート全員とランチに出かける。中間試験に向けて、丹念な繰り返しと入念な準備を行いたい。2016/9/27

405. 世界で進行する「卓越性開発ゲーム」

今日はオランダ語のクラスの帰り道に、珍しく街の中心部にある市場に立ち寄った。ここでは新鮮な野菜や果物、そして肉類や魚介類をリーズナブルな値段で購入することができる。この市場に並んでいるものを見るだけでも関心をそそられるのだが、今日はこの市場で二種類のチーズを購入した。

オランダに来てから、文字通り毎日チーズを一個消費している。近くのスーパーで購入しているチーズとは違う種類のものをこの市場で購入しようと思い、試食をしてみて美味しかった、トマトなどの野菜が散りばめられたチーズとハードタイプのチーズを購入した。

お目当のチーズを購入することができたので市場を後にしようと思ったところ、いつも通りこの市場が賑わっていることに改めて気づいた。この市場で毎日どれほどの経済活動が営まれているのかが気になった。その経済規模を概算すると非常に微笑ましいものだったのだが、その計算が終わった途端に、昨日読んだ“The Great British Medalists Project: A review of current knowledge on the development of the world’s best sporting talent (2016)”という論文の内容が頭をよぎったのだ。

この論文は、スポーツにおける卓越性を開拓するための鍵となる要因と最新の研究成果を紹介しており、実践者のみならず政策立案者に向けて執筆されたものである。ご存知かもしれないが、今回のリオ五輪では英国が金メダルの獲得数において米国に次いで世界第二位の地位を獲得した。その背景には、英国政府の多大なる経済的投資が存在していたのである。

少しばかり歴史を遡ると、英国は2008年の北京五輪の時には獲得メダル数において世界第四位であり、その時は国家としてアスリートの支援と育成に対して日本円で300億円ほどの金額を投資している。2012年のロンドン五輪の時には獲得メダル数において世界第三位であり、その時は350億円ほど投資している。そして今回のリオ五輪では、国家として450億円を上回る経済投資をしていたのだ。

今回の五輪において、英国の躍進には敬意を払っていたのだが、これほどまでの経済投資は少し常軌を逸しているのではないかと思われた。450億円という金額は、おそらく世界の小さな国々の年間GDPに匹敵するものだろうし、英国はこの経済投資を自国の様々な社会問題を解決するために使っても良かったのではないかと思ったのだ。だが、英国がそうしなかった隠れた理由というものがありそうである。

もはや近代オリンピックは、歪んだ政治と不健全な資本主義の癒着と切っても切れないものであるため、世界の他の国と同様に、英国もそれらの癒着が生み出す常軌を逸したメダル獲得競争に国を挙げて盲目的に取り組んでいるのだろう。私はどうも、政治と経済が生み出すこの種の問題に対して、科学もその問題に加担しているように思えて仕方がないのである。

正直なところ、上記の論文は「タレントディベロップメントと創造性の発達」のコースで取り上げられているものであるが、この領域に関する多様な論文を読んでも、そこには人間の卓越性の発達に関する倫理的かつ哲学的な視点が根本的に大きく欠如していると気付いたのだ。つまり、知性や能力の卓越性というのはどう意味を持つものなのか、どうして私たちは卓越性を発達させていく必要があるのか、という議論を経ないまま、そもそも「卓越性の開発は善である」という前提のもとに全ての科学論文が研究を開始しているように思うのだ。

同種の問題は、そっくりそのまま構造的発達心理学などの領域においても見受けられる。結果として、私たちは卓越性の開発が善であるという思想を盲目的に信奉する形で、人々の知性や能力を開発することに躍起になったり、上記の例のように膨大な経済投資が行われる羽目になるのではないだろうか。

実際に、世界のほぼ全ての国々がこうした「卓越性開発ゲーム(卓越性向上パーティー)」に従事している有様なのである。自国の様々な社会問題をなおざりにし、挙句には人々をバーンアウトさせてしまう危険性を秘めたこの種の「卓越性開発ゲーム」に純粋に参加できるというのは、やはり現代の国々は非常に未成熟だと言わざるをえない気がしている。

自分の専門領域が社会の諸々の分野と関係していることを適切に捉え、自己の専門領域が社会に対して不要なゲームを生み出しうる危険性を踏まえた、倫理的かつ哲学的な示唆が含まれた科学論文があまりにも少なく、それには興ざめである。2020年に開催される東京五輪に向けて、日本も英国と同様な道を進みそうな予感がしている。

406.科学的な言語と哲学的な言語

今日は「タレントディベロップメントと創造性の発達」というコースの第三回目のクラスがあった。本日のメインピックは、スポーツの領域に焦点を絞り、才能の発掘と開発に関する科学的なアプローチと研究成果を取り扱った。科学と哲学に関して昨夜はあれこれと考えさせられることがあったため、考えを整理し、気持ちを落ち着けてクラスに臨む必要があった。

本日のクラスを担当したのは、私の良きメンターでもあり友人でもあるプログラム長のルート・ハータイである。講義の全体を通じて、タレントディベロップメントに関するルートが持っている深い知識には頭が下がる思いであり、クラス内での質疑応答に関しても実に見事なものである。このコースの受講者は、そもそも修士課程以上の人たちであり、私が思うに、彼らは科学的な思考をする訓練を十分に積まれている。

彼らが質疑応答の中で用いる語彙や意味の作り方を観察していると、彼らの言語は科学者の思考の仕方を体現したものであると感じている。これは何も科学に関する難解な学術用語を使うというこ

とではなく—実際にそれほど難解な用語を彼らは用いているわけではない—、彼らの議論の組み立て方や質問の仕方の中に、科学者としての思考方法が色濃く現れているように思うのだ。

確かに、フローニンゲン大学は研究大学であり、このコースが行なわれているプログラムも科学志向であるから、彼らのように、具体的な事象を取り上げ、科学的な実証結果に基づいて議論を進めるというやり方には納得できる。科学の領域で研究者として活動していくためには、そうした議論の仕方や思考方法は必須の素養だということはわかる。

しかしながら、本日のクラスを通じて気づいたのは、彼らの言語と私の言語はどうも違う特徴を持っているのではないか、ということだ。お互いに共通して英語を話しているため、表面的には同じ言語を扱っているのだが、思考対象は随分と異なり、また意味の作り方や議論の仕方にも随分と違いがあると感じたのである。

おそらく私自身が、科学と哲学に関する双方のトレーニングが中途半端であるということや、実証結果を即座に参照して議論を進めるというよりも、実証結果の意味そのものを考えてから、その実証結果を抽象化させて議論を進めようとする自分の特性に起因しているのかもしれない。もちろん、実証結果の意味を掴み、それを抽象化させて議論の俎上に載せることは、多くの科学者が行っている思考方法だろう。

そのため、彼らの言語と自分の言語の違いは、やはり思考対象を哲学的な側面に向けるか科学的な側面に向けるかにあるような気がしている。これまでのクラスでは、「タレントディベロップメントと創造性の発達」という科学領域の中にある様々な理論や概念、そして実務の世界への応用方法などについて学んできた。

当然、それらの知識は私にとって非常に実りのあるものなのだが、「タレントディベロップメントと創造性の発達」という領域を哲学的な側面から捉えたいという強い思いが私の中で湧き上がっているのも事実である。こうした正直な気持ちに従って、哲学的な側面を探求すると同時に、このコースでは科学的言語の習得に黙って励むことも重要になるだろう。

今日のクラスでは色々と発言しすぎたように思う。様々な言語と思考方法を磨いていく必要がある、と感じながら帰路に着いた。

407.所属プログラム内の興味深い研究プロジェクト

先日、論文のスーパーバイザーを務めてくださるサスキア・クネン教授とミーティングをしたのと同様に、私の同僚たちも今週中に各々のスーパーバイザーとミーティングを行うそうだ。フローニンゲン大学は研究大学としての確固たる地位を築いており、ここにいる研究者たちは絶えず実務家と交流を図り、実際に具体的な共同プロジェクトを様々な実務領域で行っていることが伺える。

私が在籍している「タレントディベロップメントと創造性の発達」というプログラムもご多分に漏れず、教育・スポーツ・ビジネス・芸術などの幅広い領域で多様な共同プロジェクトを行っている。今回、修士論文を作成にするにあたり、もちろん学生側が自分の関心に合わせて研究テーマを設定することができる。まさに、私は一年前に計画をしていた研究テーマをここで取り上げるつもりである。

一方、学生には他の選択肢も与えられており、指導教官が推進するプロジェクトに参画する形で修士論文を作成することもできるのだ。プログラム長のルートから送られてきた共同プロジェクトリストを見ると、実に多彩かつ一見すると羨ましいようなプロジェクトが並んでいる。

例えば、サッカー好きの私にとっては、オランダ一部リーグのFCフローニンゲンと共同して、クラブのユース選手からトップチームに在籍している選手たちのサッカーにおける卓越性を研究するというプロジェクトはとても魅力的に映る。このプロジェクトに参画するわけでもないのに、詳細に紹介してもあまり意味はないと思うのだが、FCフローニンゲンはより科学的な方法でユース世代の選抜を行いたいという思いを持っており、サッカーの才能発掘に関する測定手法の開発と提案を行うことがこのプロジェクトの目的となっている。

その目的に加えて、サッカー選手のレジリエンスをどのように測定し、アスリートに求められるメンタルスキルをどのように高めていくのかに関する提案、サッカー選手に不可欠な状況判断力や試合を読む力をどのように磨いていくのかに関する提案なども含まれている。このプロジェクトに参画する者は、アカデミックの世界から来た部外者としてみなされるのではなく、FCフローニンゲンのチームの一員としてみなされると記載されている。

少なくとも週に一度はFCフローニンゲンのクラブハウスに常駐し、実際の試合を観戦したり、選手のトレーニング風景を観察するなどのデータ収集を行うことになるそうだ。これはサッカー好きの私に

とって非常に魅力的なプロジェクトなのだが、オランダ語を話せることが条件に上がっているので最初から私にとっては参画が難しいプロジェクトであった。今後、このプロジェクトにアサインされた同僚にあれこれと研究内容について話を聞いてみたいと思う。

その他の面白いプロジェクトとしては、プロの音楽家の心理的特性に関する研究プロジェクトがある。プロの音楽家として大成するためには、そこまでの道のりの中で様々な苦難を乗り越えていかなければならない。そうした苦難を乗り越えるための心理的特質はどのようなものであり、それはどのように生まれ、どのようにそれを支援することができるのかを調査していくことがこのプロジェクトの目的となっている。

また、プロの音楽家と言えども、常に精神や身体を最善の状態に保った中で演奏に取り組めるとは限りらず、演奏中に思わぬミスやアクシデントに見舞われることがあるだろう。そこでこの研究では、その場の状況を無理にコントロールするのではなく、その場で起こることを純粋に受け入れ、常に今というこの瞬間にとどまるようなマインドフルネスの訓練が、プロの音楽家の卓越性の開発にどのような影響を及ぼすのかについても焦点を当てているのだ。

練習では素晴らしい演奏を披露できても、実際のステージの上ではなかなか本来のパフォーマンスが発揮できないという演奏家は数多くいると思われるため、こうしたマインドフルネスの訓練が演奏家の能力の開発にどのような影響を及ぼすのかは個人的にも大変強い関心がある。

以前、クネン教授と話をしていた時に、「ここでの修士論文プロジェクトは、生徒単独で行うのではなく、研究コミュニティの中で様々な教授や同僚と共同しながら進められる」ということを聞いていた。実際に、私の主たる指導教官はクネン教授であるが、先日のミーティングで研究内容を説明すると、今後の研究プロセスの進行に応じて、他の様々な教授の指導を受けることになった。

さらに、指導教官は学生の論文執筆を単に指導するのではなく、論文の共同執筆者にもなりうるということを知った。研究者を育成していく上で、実に素晴らしい仕組みがこの大学に存在していると思わされた。

408. 昇り出る太陽と沈みゆく太陽

フローニンゲンの街も完全に秋に入ったようであり、それは気温の低下のみならず、朝夕の太陽の入出時間に如実に現れ始めている。こちらに到着した八月初旬は、夜の十時近くまで明るかったのに対し、現在は夜の七時半を超えるとかなり暗くなっている。

朝に関しては日の出時間が七時近くになっている。太陽を拝む時間が短くなるにつれ、太陽とは一体何者なのかを考えてしまう。日が沈んでいる最中において、太陽は何者でもないかのようにどこかに存在しているように思える。

一方、日が出ている最中において、太陽は自分が何者かであることを示すような存在感を放っている。何者でもないかのような振る舞いと何者かであるような振る舞いを示す太陽に対して、今の自分が置かれている状況をついつい重ね合わせてしまう思考経路が出来上がっているようだ。

それは、オランダに来てから感じている精神的安らぎと精神的緊張の問題と関係している。オランダに到着してから、当たり前なのだが、自分が日本や米国で何をしてきたのか、どんな専門性があるのかを知っている人は、このフローニンゲンにおいてほとんど誰もいないだろう。

私が何者であるかを気にかけるような人などほとんどいないであろうし、それはまるで私という存在が全く相手にされていないかのように映ることさえある。逆にこのように、自分が何者かを過度に意識して生きる必要がない分、肩に重荷がないことは間違いない。そのおかげで、自分は何者でもないという解放感の中を毎日生きている、という側面もある。

一方、そうした状況の中で、何者かであろうとするような衝動が自分の内側に存在するのも紛れもない事実だろう。私という存在がこの社会の中で与えられた役割を果たすためには、必ず自己が何者であるかを把握した上で何かしらの関与をしていく必要があるのだと思う。

自分は何者でもないというある種の自己解放感と自分は何者かであるという自己限定感の間の相克で揺れ動いているのが今の自分の姿だろう。おそらく、これら二つの対極は自己の成熟過程に不可欠な要素であるとともに、両者の間を揺れ動くことも重要なプロセスなのだろう。

今のところ、これら二つの対極性を統合する動きも見えず、もちろんながらその先にある境地が見えていない状況に置かれているのは事実だ。実際の太陽は自分が何者でもないことや何者かであることを一切念頭に置いていないのと同様な境地があるのだと思う。だが、今の私にとってそこへ到達するまでの道のりは、極めて長いように思われる。2016/9/28

409. 何気ない日常から

今日からしばらくフローニンゲンの街は天気が悪くなるそうだ。今朝は、起床直後からまずはオランダ語の試験に向けて学習を行った。オランダ語の試験は初めてであるため、何かと未知なことが多いが、これまでの学習内容を振り返る上でもこうした試験があるのは有り難いことである。

オランダ語の学習は毎朝の実践の一つとして習慣化されており、ある意味、毎朝これまでの学習内容を復習するようなことを行っている。ただし、今回の試験に向けて、それでは不十分であるため、今朝はいつも以上にこれまでの学習単元を振り返っていた。

ここ最近の気づきとしては、私の探究活動の合間合間にオランダ語の学習を挟んでいくことは非常に良い気分転換になっているということである。発達科学や複雑性科学の探究ばかりを長時間にわたって行っていると、いくらその領域を愛していたとしても必ずどこかで疲労が現れるのである。

そのため、毎日の探究活動で工夫をしていることは、ある程度の時間を一つの探究活動に充てたら、仮に領域は同じでも、単元を変えたり、論文や書籍を変えることによって、集中力を継続させるようにしている。そこにオランダ語の学習を入れると実に良いスパイスになると感じている。これはおそらく、私の探究活動が全て英語空間で行われているため、オランダ語の学習を挟むことによって、別の思考空間へ移行することに伴う気分転換が図れているのだと思う。

一つの領域や一つの単元に留まる時間をあまり長くしないようにし、複数の領域をある一定の時間間隔で行き来することが自分には合っているようだ。明日の試験に向けて夕方と寝る前にもオランダ語の復習を行いたい。

早朝のオランダ語の学習を済ませると、次に取り掛かった仕事は論文の提案書の作成である。これは今週の月曜日にクネン教授から課せられた課題である。私のデータから導き出される研究の結

果次第だが、今回の研究をもとにクネン教授と共同論文を執筆することになった。これは私から依頼をしたことではあったのだが、クネン教授が快く共同研究を承諾してくれたことは有り難かった。

フローニンゲン大学での学位取得論文を単なる修士論文にはしたくないという強い思いがあるため、論文の提案書作成にも自ずと力が入る。実際の論文の完成は随分と先のことなのだが、こうした長期的な時間幅を持つ仕事を少しずつ着実に進めていくことによって、私の中で大切にしているものが確実に磨かれていくことを確信している。

毎朝の仕事の一つに論文執筆に向けた作業を組み入れたので、無理をせず着実にこの仕事を進めていきたいと思う。今週末に提案書をもう一度練り直し、来週の月曜日に行われるクネン教授とのミーティングに備えたい。

本日は午後から、海外生活五年目にして初めて、日本人以外の美容師に髪を切ってもらった。これまで、日本にいる時は月に一回は髪を切ってもらうようにしていたのだが、フローニンゲンに到着後、その他にするべきことがあれこれとあったため、なかなか髪を切ってもらう機会がなかったのだ。

というよりも、フローニンゲンの街には日本人の美容師がおらず、この街で外国人に自分の髪を切ってもらうことに躊躇していたというのが正直なところである。確かに、アムステルダムやロッテルダムには日本人の美容師がいるようなのだが、フローニンゲンからアムステルダムやロッテルダムに行こうとすると片道で二時間半かかる。

これは東京から新大阪へ新幹線で行く時間に匹敵する。しかも、アムステルダム中央駅からその店に行くまでの時間を考えると、約三時間はかかる計算になるのだ。こうしたことを考えると、やはりフローニンゲンの街で腕のいい美容師を探し当てるしかないと思った。

先日知り合いになった日本人の方に聞いてみると、街の中心部の近くに一つお勧めの店がある、ということを教えてもらった。そこには日本人の髪を切ることに慣れている美容師がいるとのことだったので、先週中に予約を済ませ、今日はその店に行ってきた。その店で経験豊富かつ腕が良いという評判のロダニムというオランダ人の美容師にお願いすることになった。

米国在住中は、常に日本人の美容師の方にお世話になっており、その方たちから一様に、日本人の髪質は特徴的であり、外国人美容師には髪の毛をすくという概念がない、ということを知っていた。しかし、今回お願いをしたロダニムは日本から特殊なハサミを購入しており、非常に満足のいく髪型に仕上げてくれたのだ。

終始何かとロダニムと会話をしていたのだが、その中でも、日本人を含めて、多様な国籍の人の髪の毛を切ることによって技術がより向上した、という彼の話が印象に残っている。もちろん同じ国籍でも、人によって髪の毛の特徴は異なると思うが、国籍が違うことによって髪の毛の特徴はより変動性の激しいものになる。

ロダニムの技術が確かなものであり、非常に洗練されていると感じたのは、まさに彼が様々な種類の髪を切るという「非線形学習 (nonlinear learning)」の考え方に近い修練を長らく積んできたからではないか、と思わされた。ロダニムの技術が非常に巧みであったことに加え、彼の話から色々と考えさせられることも多かったため、これから二年間は彼にお世話になろうと思う。2016/9/29

410. 学習や実践に最適な「ノイズ」を生み出すために

昨日、先日の講義内容についてプログラム長のルート・ハータイ教授に色々と質問をしていた。ルートと私は年齢的には一つしか違わないのだが、彼は私の良きメンター役として、私の知らない領域や分野に関して様々なことを教えてくれる非常に頼れる研究者である。

ルートの研究論文の中で「三つの種類のノイズ」があることを以前に紹介したと思う。簡単に振り返っておくと、知性や能力を発揮する際に最も変動性が激しいのが「ホワイトノイズ」と呼ばれるものであり、最も変化に乏しいのが「ブラウンノイズ」と呼ばれるものであった。さらに、変動性が高すぎもせず低すぎもしない時に見られるのが「ピンクノイズ」と呼ばれる現象であった。

ルートの研究から明らかになったのは、一流のボート選手はパフォーマンスを発揮している最中に「ピンクノイズ」を生み出しており、ボート競技の初心者は「ホワイトノイズ」を生み出している、ということである。ルートの説明を元にするると、動的なシステムの挙動に関してピンクノイズは最も理想的な状態だと言える。

ここから私が考えたのは、動的なシステムの挙動に対してピンクノイズが最適な状態であれば、それはシステムの発達においても最適なのではないだろうか、という仮説である。そして、ピンクノイズが動的なシステムの発達に理想的な状態であれば、そのような波を持つノイズを作り出す(あるいは維持する)ような介入方法が支援の過程で重要になると思ったのだ。

以前、「非線形教授法」について触れた時に、学習や実践の中にノイズを組み入れることの重要性を指摘したと思う。しかし、ここで注意しなければならないのは、どのような人にどのような種類のノイズを提供するか、ということである。具体的には、学習者や実践者の習熟度に応じて、どのようなノイズを学習に組み込むかを変えていく必要があると思うのである。

例えば、ルートの研究が示すように、ある領域における初心者が実践の過程で激しい変動性を発揮している場合には、その変動性を低減させるような介入方法が求められるだろう。その際には、例えば、非線形教授法とは逆に、基本的な反復練習のようなものが効果を発揮する可能性がある。

初心者がある領域で変動性の激しいパフォーマンスを発揮している主な理由は、基礎的な知識やスキルが脆弱であり、土台が確固としたものではないため、パフォーマンスが不規則に乱高下してしまうことにあるのではないだろうか。このような初心者にまず求められるのは、基本的な知識やスキルという土台をしっかりとしたものにするための実践である。

私たちは何か同じことを繰り返すことによって、ある種の型が身につくという経験をこれまで何度もしていると思う。このように、型を身につけるような反復練習は、初心者の知識基盤やスキルの土台を形作ることに役立ち、ノイズを低減させるような役割を果たすように思うのだ。

一方、実践者が何か伸び悩みを感じている時は、もしかしたら動的なシステムである実践者自身が安定期に入っており、その挙動はブラウンノイズを示している可能性がある。ブラウンノイズの状況下においては、波の変動性が乏しいため、変化に富む波を意図的に生じさせるような介入方法が望ましいかもしれない。

例えば、ある程度の反復練習を積んだ後に、今度は様々な状況を想定した実践を行ったり、複数の実践を組み合わせたりすることなどが有効だろう。ここで大切なのは、反復する知識項目やスキ

ルの種類が同じであったとしても、その知識やスキルを違う角度から眺めることや用いることを促すことである。

そうすることで、実践者が発揮する波に変動性が加わり、ピンクノイズの状態に近づいていくかもしれない。ただし、上記の内容は全て私の仮説であり、科学的にその効果が検証されているわけではない。実際に、ルートにほぼ同様の考えを伝えたところ、スポーツ科学の領域においてもまだそのような研究はなされおらず、これから着手していきたいテーマであるということであった。

先行研究論文を一つほどルートから紹介してもらい、それを読むと、ウォーキング中にピンクノイズを生み出すためには、ピンクノイズの波形を持った音源を聴きながら歩くことが効果的である、ということがわかっている。ピンクノイズはそもそも、私たちの身体や脳が最適な状態にある時に発揮されやすく、もしかすると巷で流行のマインドフルネスメディテーションなどがピンクノイズに近い状態を心身にもたらすかもしれない。

もしそうであれば、常にマインドフルネスの状態を実践を行えば、パフォーマンスの波形をピンクノイズの状態に近づけていくことも可能かもしれない。ルートとのやり取りからそのようなことを考えさせられた。

411.オランダ語のテストより

昨日の激しい雨を経て、今日は今朝から穏やかな一日であった。特に朝の気温が下がっており、道行く人の中にはマフラーを巻いている人や厚めのジャケットを羽織ってる人もいる。

ここ最近、内観的な自己が常態化しており、朝の起床と共に、その日の自分の活動エネルギーの初期値をおおよそ特定することができる。動的なシステムにおいて、初期値がどのような値を取るかは極めて重要であり、初期値によってシステムの挙動が左右されてしまう。動的なシステムが持つこのような特性を「初期値依存性」と呼ぶ。

今日の私という動的なシステムが持つ初期値の値そのものは決して高くなかった。この値が持つ質感は、オランダ語を今日はあまり喋りたくないという気分を生み出していたように思う。そのような気分の中で家を出発し、オランダ語のクラスへ向かった。

語学センターへ向かう時にいつも通る「クラネヴェ通り」を今朝も歩いていると、道の舗装工事がもうすぐに完成しそうであることがわかった。早朝からクレーンや小型のブルドーザーが稼働しており、完成に向けてラストスパートを行っているように思えた。

工事現場のある作業員が何やら道の脇にある家の窓に向かって微笑んでいる。その家の近くに差し掛かると、そこは保育園であることがわかった。保育園の窓から小さな子供達が、興味津々に顔を窓にくっつけて作業の様子を眺めていたのだ。

クレーンやブルドーザーの一挙手一投足を食い入るように眺めている子供達。彼らの表情は好奇心に満ち溢れており、それは非常に微笑ましく思った。そのような思いと共に、彼らのように、日々の現象を常に新鮮な感性を持って捉えることを忘れてくはないものだ、という思いが湧き上がっていた。

子供達からそのようなことを学んだにもかかわらず、やはり今朝はオランダ語を話す気分ではなかった。そのような気分を引きずりながら教室に到着した。早いもので、オランダ語の初級コースも佳境に差し掛かっている。今日はこれまでの単元の習熟度を図るテストが行われた。

テストの前に、思考を英語からオランダ語にするための提案が教師のリセットからあった。最初に、オランダ語の音楽を聴いて、ディクテーションをするというエクササイズが行われたのだ。私の頭の中はテストのことで一杯であり、流れてくるオランダ語の曲はほとんど上の空であった。そのため、私は英語空間の中でオランダ語のテストを行う羽目になった。

確かに今のところ、私のオランダ語の言語空間は脆弱なものにすぎないので、英語を用いながらオランダ語を考えるというのはいつもとそれほど変わらないと言えば変わらないのだが、根本的な気分のところがオランダ語を使うことに対して乗り気ではなかったのだ。

テストの中の読解問題や文法問題は難なく解けたが、いくつかスペルを忘れていた単語があったり、リセットが読み上げるオランダ語を正しく書き取るというセクションは少し難しかった。だが、総じて今回のテストの結果は上々であり、次のレベルのコースに進めそうである。

今日テストを受けて改めて思ったが、成人になってからも、やはり自分の知識や学習の定着度を試すような機会は重要であると思った。学習項目ごとに定期的に何かテストのようなものがあれば望ましく、そうしたテストがあれば、自分の中で知識の抜け漏れを再確認したり、まとまった学習をすることにつながると思うのだ。

今回のような中間試験は、教育科学の世界では「総括的評価 (summative evaluation)」と呼ばれるものに該当するだろう。今回の試験はあくまでも各学習者の習熟度を測定するためのものであり、その結果によって今後のオランダ語のクラスの内容が変更になったり、私たちの習熟度に応じた教育実践がなされるわけではないため、今回のテストは総括的評価の特徴を強く持っていると言えそうである。

私は今回の結果を元に、自分の学習方法を見直すようなフィードバックを自分自身に対して行い、学習の在り方に少しばかり軌道修正を加えたので、個人的には「形成的評価 (formative evaluation)」の機能も帯びていたテストであったように思う。

このように、今回のテストのおかげで、学習単元の総復習に役立ったばかりでなく、自分の現在の立ち位置(習熟度)を把握し、今後の学習方針を自分の中で再構築していくことにつながったのである。オランダ語のみならず、自分の専門領域においても、上記のような性質を持つテスト(評価)を自分に対して定期的に課していきたいと思う。2016/9/30

412.知識の重要性について

昨日は、第二回のオンライン読書会に向けて、自分でも事前課題について回答を少しばかり考えていた。この課題において、基本的には事前知識を必要としないオープンクエスチョン形式を意図していたのだが、中には構造的発達心理学を含めた発達科学の知識を必要とするものも混じってしまっていた。

最初の設問からある程度の事前知識を要求するような作りになっていることに気づいた。自分でも幾つかの設問に回答してみたところ、仮に今から五年前にこれらの設問に回答しようとする、きっと自分の回答が大きく異なるだろうと思った。主な理由としては、やはり五年前と比べて、当該専門領域に関する知識が拡張したことにあるだろう。

また、それらの知識を自分の体験に引きつけて考えることを少しずつ継続させてきたということ、さらには当該専門領域の知識を活用した具体的な実務作業に携わってきたということ、それらの二つも重要な点だろう。

以前の記事で、知識基盤を構築することの重要性について言及していたように思う。五年前の私が仮に設問一（ロバート・キーガンとエリック・エリクソンの発達モデルの共通点と相違点について）に対して回答し、その文章をカート・フィッシャーの測定手法（尺度の最大値は12）で評価すると、おそらくそのレベルは9か10ぐらいだったのではないかと思われる。

当時はキーガンの理論に対する理解を深めている最中であつたし、エリクソンの理論に至っては高校の倫理の授業で習った程度の知識しか持ち合わせていなかった。そのような中で両者の理論モデルを比較するというのは至難の技であり、その時の自分の回答はおそらく、キーガンとエリクソンの理論の表面的な特徴に囚われ、二つの理論が生まれた歴史的背景や文脈などを考慮することなく、非常に単線的な説明になっていたと思う。

つまり、回答の知識構造が貧弱であり、重層的な構造を持つ回答になっていなかったのではないかと容易に想像できる。当時の自分の回答は、二つの理論が持つ特徴を単純に列挙するだけのレベル9のような特徴を持っていたか、あるいは、列挙された特徴を表面的に結びつけるようなレベル10の特徴を持っていたように思う。

言語依存型の能力を発揮する際には、やはり知識の有無は重要な鍵を握っている。仮にキーガンとエリクソンの理論に関して豊かな知識を持ち合わせていれば、それらを自由自在に縦横無尽に組み合わせることが可能になり、回答に厚みもたらされ、回答そのものが一つの重層的な体系（システム）になると思うのだ。

専門家と非専門家が持つIQと知識の関係性について以前紹介したように、仮に高度なIQを持ち合わせていなくても、自分の専門領域に関する知識基盤が強固なものであれば、専門領域内で知性や能力を発揮する際には、IQの高い非専門家を圧倒的に凌ぐことができるのである。

それもそのはずで、IQという尺度はそもそも一般的な知能を測定するために開発されたものであり——知性や能力の測定手法を研究する専門家の間では、IQは過去の遺物と化しており、一般的な

知能を測定できるかどうかも疑わしいとされている——、特定領域内で発揮される知性や能力を個別具体的に測定するものではないからである。

近年の発達科学が強調するように、私たちの知性や能力は、具体的な文脈の中の具体的なタスクと紐づく形で発揮されるため、特定の領域で鍛錬を積んだ専門家が高度なIQを持つ非専門家を凌ぐパフォーマンスを発揮することが可能になるのである。自分で作問した事前課題の設問に回答してみたところ、上記のような気づきが得られた。

五年前と比べると、やはり量的にも質的にも異なる知識基盤を持つ自分が今ここにいることは確かだろうし、それが自分の回答に如実に表れているのを見ると、改めて知識の重要性に気付かされたのだ。今私が意識していることは、一つの領域ではなく、多様な領域の専門知識を獲得していくことによって、様々な分野を自由に横断できるような柔軟性を持った知識体系を構築していくことにあると言えるだろう。2016/10/1

413. 言語世界の階層性

今日は第二回目のオンライン読書会を開催した。久しぶりの読書会であり、私にとっては数ヶ月ぶりに日本語を話す機会となった。そのため、読書会の途中で、文章の接続のさせ方がおかしかったり、日本語の単語が一瞬出てこないことに見舞われた。

私が思っていた以上に、日本語の話し言葉をよどみなく紡ぎ出していくことが困難であった。オランダ語の習熟度が安定期に入るまでは、こうした状況に置かれるのもやむをえないのかもしれない。オランダ語の学習を進めれば進めるほど、確かにオランダ語の言語世界が構築されていくことは間違いない。

しかし、オランダ語の言語世界が構築されればされるほど、私が持っている他の言語世界がグラグラと揺れ動かされるような現象が時折見受けられる。こうした現象を観察していると、以前に見た映画「Inception(インセプション)」のことを思い出した。

この映画の中で登場人物たちがどんどん深い夢の世界に入ってくのと同じように、私の中の言語世界も階層性を持っているようなのだ。最初にこの階層性に気付いた時は、自分にとって日本語の言語世界が最も深層にあると思い込んでいた。

しかしながら、日本語の言語世界はもしかすると最も表層にあるのではないかと最近思うようになっている。最も表層にある日本語の言語世界の一つ下の階層には、英語の言語世界が広大に広がっている。そして、その下にオランダ語の言語世界が立ち現われつつあるのだ。

この最も深層部分にあるオランダ語の言語世界にいると、時折、深い夢の世界に自分がいるような感覚を持つことがある。そして、この最も深層にある言語世界が揺れ始めると、その上の言語世界にも揺れが伝染し、結果として最も表層にある言語世界にも揺れが伝わる、というような構造になっているようなのだ。あれだけ長い時間をかけて構築した日本語の言語世界が、他の言語世界の揺れに影響を受けるというのは皮肉な話でもあり、不思議な話でもある。

また、こうした三つの言語世界で生きる自己の特徴についても着目してみた。すると、これら三つの世界における自己のパーソナリティはかなり異なっていることがわかる。英語の言語世界にいる自分は、より積極的に自己の存在を打ち出していこうとするような特徴を持っている。

この背景には、英語を母国語としないため、英語で自分の存在を定義づけることを半ば脅迫的に迫られていた、という過去の経験があるのかもしれない。五年半前に初めて米国で生活を始めた際に、英語を使っている自分が誰なのかわからなくなるような瞬間に頻繁に遭遇していた。

つまり、英語という言語世界の中に生きる私の居場所を発見することや構築することに関して、大きな課題を抱えていたのである。この課題を克服するのに、二年半か三年の月日を要したように思う。ただし、この課題を克服したとはいえ、真の意味での解決にはまだ至っていないのかもしれない。その証拠として、英語の言語世界にいる私は、未だに自分の存在を確固たるものとするような動きを見せるのである。

興味深いことに、オランダ語の言語世界にいる自分もそのような特徴を持っているようなのだ。今のところ、英語の言語世界にいる私とオランダ語の言語世界にいる私の間に大きな差は見られない。どちらもその言語世界の中で、自分の存在基盤を作ろうとすることに躍起になっているようなのだ。

こうした躍起さが収まる日が来るまでは、言語世界の最も表層にある日本語世界の私は、絶えず揺れを感じることになるだろう。2016/10/1

414. 知識を活用する実践力

今週末は休日の二日間ともに曇り空である。気温もめっきり寒くなり、家の中でも長袖や靴下を身につけるようになった。欧米の寒い地域の家には、窓の壁際にヒーターがよく備え付けられている。現在のフローニンゲンの私の自宅にも、リビングと寝室、そしてトイレにヒーターが備え付けられている。

これを使う日が刻一刻と迫ってきていることを身にしみて感じている。秋のそよ風というよりも、今日は秋の寂びしい風が吹いていた。そのような中、昨日と引き続き、今朝もオンライン読書会を開催した。

読書会の参加者のある方から、知識に関する話を聞いてハッと気づかされたことがある。今の私は、「知識とはそもそも一体何なのか」というテーマ、言い換えると知識の性質に関心を寄せているようなのだ。また、知識がどのようなプロセスで獲得され、どのように知識体系がより重層的な構築物になっていくのかにも関心がある。

どちらの関心事項にも、哲学の領域における認識論が特に鍵を握ると思う。知識が重層的な構築物に変容していくプロセスは、実際のところ、構造的発達心理学が扱う主要テーマであるため、これまでのように漠然と発達モデルを眺めるのではなく、知識体系の構築プロセスに焦点を絞って関連書籍を読み直す必要があると思っている。

知識の性質や知識体系の獲得プロセスに対して現在関心を持っている理由の一つには、自分自身が新しい知識領域に身を投じていることが挙げられるかもしれない。ダイナミックシステム理論やダイナミックネットワーク理論など、新しい知識領域に参入している一人の当事者として、未知の分野に関する知識とどのように付き合っていけばいいのか、という課題に直面していると言える。

現在抱えている課題を言い換えると、新たな領域の知識を一つの理論体系として駆使できるようになるためには、どのようなプロセスを経る必要があるのか、ということになるだろう。とかく未知の分野に参入すると、基本的にはその領域固有の知識を一から習得していくことになる。

もちろん、他の領域で獲得した知識やこれまでの経験によって、新しい領域での知識体系の構築速度には差が出てくると思われるが、基本的には専門知識を一つ一つ理解していくという作業が出発点になるだろう。「知識を活用する実践力」の重要性に異論を挟むことはないのだが、知識が具体的な文脈で実践に活用されるためには、実は随分と長い道のりがあるように思うのだ。

結論から述べると、ある知識を実践の場で活用するためには、その知識を単独で身につけているだけでは不十分であり、その知識を一つの体系の中に組み込んだ状態で身につけておく必要があるのだ。カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論で言えば、ある知識を真に実践の場で有効活用するためには、知識レベルを最低限11以上にしておく必要があると考えている。

フィッシャーのレベル尺度では、レベル9は抽象的な概念や理論のある一つの側面を理解できるような段階である。例えば、「ダイナミックスキル理論とは、人間の知性や能力の動的な発達プロセスに着目するものである」というのは、ダイナミックスキル理論の一つの側面を言い表しているため、この発言を生み出す構造はレベル9の知識段階のものだと言える。

一言で述べると、レベル9の知識段階では、概念や理論の単一的な側面しか捉えることができないため、このレベルではダイナミックスキル理論を深く理解しているとは言えず、実践の場で活用するには実におぼつかないのだ。上記のように、ダイナミックスキル理論に関する表面的な定義だけを獲得している状態では、その理論を実践の場で活用することなど到底不可能であることは想像に難くない。

ここからレベル10に移行すると、抽象的な概念や理論の複数の側面を捉えることができ、それらを一つの線で結び付けられるようになってくる。例えば、「ダイナミックスキル理論は、知性や能力に関する12個のレベル尺度を持ち、複雑性科学の様々な概念を取り入れている。例えば、「創発(emergence)」という概念は、あるレベルから次のレベルに移行するときに見られる現象である」とい

ように、ダイナミックスキル理論に関して複数の側面(視点や要素)を捉え、それらを緩やかに関係付けることができるようになってくるのだ。

このレベルに到達すれば、先ほどのレベル9のように単発的な知識—点のような知識—ではなく、幾分重層的な知識を獲得していることになるため、実践の場で起こる諸々の現象を徐々に説明できるようになってくる。しかしながら、この知識レベルでもやはり不十分であり、非常に動的かつ複雑に変化する実践の場で即座に知識を活用できるようになるためには、より深いレベルで知識を獲得していくことが必要になるだろう。

そのため、少なくともその分野の知識を一段上のレベル11の段階まで高めていくことが重要になると思う。このレベルに至れば、ある概念や理論を構成する要素をより多面的に認識することができるだけでなく、それらの要素を縦横無尽に組み合わせ、一つの知識体系(システム)として保持することができるようになる。

往々にして、ある知識が実践の場で役に立たないというのは、その知識が体系(システム)レベルで身につけていないことに起因しているように思うのだ。知識レベルが11に到達していないと、点や線で実践領域を捉えようとするため、実践の状況や文脈が変わると、点や線がずれてしまい、獲得した知識が無用の長物になってしまうことが起こってしまうのである。

状況の変化に柔軟に対応しながら知識を活用していくためには、少なくともその知識が「面」の形になっていなければならないと思うのである。まさに、知識を面として活用することができるのがレベル11である。知識を「立体」として獲得・構築することのできるレベル12や、複数の立体をメタ的に組み合わせることのできるレベル13まで知識レベルを高めることができればもちろん理想である。

いずれせよ、実践力を身につけていくためには、強固な知識体系が必要だということである。動的かつ複雑に変化する実践の現場で、獲得した知識を自在に活用していくためには、少なくともレベル11の知識段階が求められると思うのだ。2016/10/2

415. 知識体系の素材

現在、新たな知識領域を複数個同時に開拓していくことを迫られている。この開拓作業は、脅迫的なものというよりも衝動的なものである。つまり、複数個の知識領域を獲得することを外側から強制させられているというよりも、内側から突き上げてくる情動に沿って実行しているのである。

自分の書斎の中にいる今の私は、数々の読みたい書籍や論文に取り囲まれている。そして、いよいよ明後日には日本から船便で送った書籍群が自宅に届けられる。こうなってくると、少しばかり慎重に読むべき書籍や論文を選定していく必要があるそうである。

先日の読書会で用いた事前課題を振り返っていると、確かに事前知識を必要とするような設問が含まれてしまっていたことに気づく。専門知識を要求するようなそうした問いが難しく感じられる、というのは極めて正常である。知識がなければ見えてこない現象があり、知識がなければ見えてこない世界があるのは確かである。

また、知識があることによって初めて、自ら生み出せる新たな世界があることにも気づかされる。そうなのだ。知識というのは世界を認識するための手立てであるだけではなく、世界を構築していくための手立てでもあるのだ。知識のそうした性質を考えると、自分が関心を寄せる領域の知識を体系的にしっかりと身につけることが重要だということに改めて気づかされる。

現在、私はフローニンゲン大学で講義をする側ではなく、聴く側に回っているが、ここの教授陣たちは受講生に当該領域の知識を体系的に身につけさせようとするような配慮を持っていると感じている。実際に、講義の中では種々の科学的な理論や実証結果などに触れ、その領域における専門的な知識をまずは受講生に獲得してほしい、というようなメッセージを強く感じるのだ。

フローニンゲン大学で幾つかの講義を聴くことによって、これまでの私のゼミナールについて再考を余儀なくされている。これまでは体系的な知識を提供するというよりも、受講生の方たちが経験豊富な実務家であるという特性上、「実践」を強調するような内容だったように思う。

要するに、これまでのゼミナールは受講生同士のディスカッションに重きを置き、こちらからまとまった量の知識を提供することには重点が置かれていなかったことに気づかされた。確かに、これまで

のゼミナールでは、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論を取り上げたり、ロバート・キーガンの16個の段階モデルを取り上げてきたが、今後のゼミナールはより体系的な知識を獲得してもらうような内容に切り替えていこうと考えている。

その背景には、以前紹介したように、実戦に耐えうる知識というのは、そもそもある程度の量を持った体系化された知識なのだ。発達科学や複雑性科学の知識を実践の場で活用するためには、それらの領域で重要な概念や理論を網羅的に把握しておくことが最初のステップになるだろう。

つまり、体系化された知識を構築するための素材が必要になるのである。確かに、専門書籍や学術論文を読み込んでいけば、こうした素材を独学で集めることは十分に可能である。しかし、その領域の専門家でなければ、ふさわしい専門書籍や論文をうまく選定できなかつたり、あるいはそもそもそうした書籍や論文にアクセスできないという状況にいる場合もあるだろう。

そうしたことを考えると、ある領域を専門とする者が、その領域固有の知識を専門外の者に体系的に伝えていくことは大切な役割だと思う。今後ゼミナールを開講するにあたっては、今私がフローニンゲン大学で教育されているようなやり方を踏襲し、実践の場で活用することのできる体系化された知識を作るための素材を提供していくようなものにしたいと思っている。

416. レンガ造りの家々より

この三日間は外出することもなく自宅にこもって仕事を進めていたため、先ほど近所を散歩しに出かけた。仕事が煮詰まった時や気分転換を図りたい時に、散歩というのは実に優れた行為だと思う。家を出て、自宅の前にある「ヴァン・ゴッホ通り」を少し歩いてみた。こちらの通りには、私の家があるブレイトナー通りに並んでいるアパートよりも居住スペースの広そうなアパートが立ち並んでいる。

ヴァン・ゴッホ通りをしばらく歩き、今度は自宅の近くにある閑静な住宅地を歩いてみた。ここにはお洒落なレンガ造りの家がたくさん並んでいる。先ほどのアパートにせよ、目の前に広がるレンガ造りの家にせよ、共通して建物の高さは高くない。近所のアパートは軒並み、四階建てかせいぜい五階建てぐらいの高さしかない。

レンガ造りの家に関しては、せいぜい三階建てぐらいのものしかない。自分の自宅にいる時にせよ、周りの住宅地を歩いている時にせよ、妙に安心感があるのは、高層マンションや高層ビルのような建物が無いからなのかもしれない、と思った。高くそびえ立つ建物は確かに壮観なものがあるのかもしれないが、往々にしてそうした建物には人を不必要に圧倒するような何かが潜んでいるような気がするのだ。

私たち人類は進化の過程で、基本的に木よりも高い場所に居住地を築いてこなかったため、現代社会のように木々を遥かに超す場所に人工的に居住地をこしらえるというのは、遺伝子レベルでの違和感を私たちに与えるのかもしれない。少なくとも、私が現在の居住場所に対して感じている安心感と現代社会に乱立する高層な建物に対する違和感は、こうした遺伝子レベルでの感覚に則っているような気がするのである。

散歩から帰ってきて再び仕事に向かった。やはり散歩から帰ってきた後は心身の流れが整っており、仕事が滑らかに進んでいった。夕刻の仕事を終え、風呂に入り、夕食をとった。先日の美容院の帰りがけに偶然立ち寄ったチーズ屋に、様々な種類のナッツが置かれていることに気づいた。

オランダに来てから、ここ三年間継続させていた食事内容を大きく変えることにした。米を食べることが一切なくなり、昼食と夕食には多様な具材が入ったサラダとパンとチーズを食べるようになっていく。それに加えて、そのチーズ屋で発見したナッツ類を夕食で食べるようになった。

これまでナッツ類を食べるような習慣はなかったのだが、そのチーズ屋で置かれていたナッツ類が、どうも自分に語りかけているような気がしたのだ。具体的には、それらのナッツ類を見ていると、自分の脳下垂体や松果体をくすぐるような感覚があったのだ。

そうした感覚をもとにナッツ類を眺めてみると、何やらそれらが脳下垂体や松果体のような脳の部位に見え始めた。自分の脳下垂体や松果体をくすぐるような感覚と、そこに置かれていたナッツ類が脳のそれらの部位に見え始めた、という二つの理由をもってして、一つの容器からマカデミアナッツをすくい取り、別の容器からアーモンドやくるみなどが混ぜ合わさったナッツ類をすくい取って袋に詰めた。

このようにして購入したナッツ類を今食べているのだが、それらがこれほどまでに美味しいものだとは思ってもいなかった。感覚的に自分が最適だと思う個数のマカデミアナッツと他のナッツ類を食べ始めて、数日が経つ。ナッツ類を食べるとするのは、自分の新しい食生活の一つになりそうである。

夕食後、窓越しに外を眺めると、薄明かりの中に先ほどの散歩で通ったレンガ造りの家々が見える。日が沈みかけの最中にあっても、それらの家々は不気味な気配を放つことなく平然とそこにたたずんでいる。それを見る者を驚かせることもせず、自己嫌悪に陥ることもなく、ただそこにたたずんでいる。

やはり気になるのは、この家々の高さである。これらのレンガ造りの家は、高くもなく低くもないがために、その場に自然な形で存在することができているように思う。そのようなことを思う今この瞬間の私は、自分の内側にレンガを無数に積み上げて、天上界を突き抜けるほどの概念的構築物を築き上げていこうとする強い想いがあるようなのだ。

それゆえに、散歩の最中にせよ夕食後にせよ、レンガ造りの家々の高さとそのあり方が気になってしょうがなかったのだろう。

417. 虹と仕事

早朝起床すると、窓から見える景色は辺り一面闇に包まれていた。完全に太陽よりも先に活動を始めている自分がここにいる。季節は秋真っ只中である。今朝のフローニンゲンは、寒さに加えて、空一帯が分厚い雲に覆われていた。

そして、黒々とした雲から小雨が降り注いでいる。今朝もほぼいつも通りの時間に起床したのだが、どうも活動に向かう気力が減退しているように思えた。そのため、もう少し睡眠をとってから活動を開始しようと思い、20分間ほど睡眠を追加することにした。短い睡眠の後、気力の減退感から回復していることに気づき、早朝の仕事に取りかかった。

一時間ほど仕事に没頭したところでふと窓から外を見ると、先ほどの分厚い雲が柔らかな雲に変化していた。そして、太陽が昇り始めることに呼応して、一筋の虹が現れたのだ。ヨーロッパ風の赤いレンガの家々を架橋するような虹が空に架かっていたのである。

虹の片方は家の屋根に架かっており、もう片方は柔らかな雲と青空の隙間に向かって伸びていた。想像上の私は、この虹を通して地上から天上へ、天上から地上へと自由に行き来をしていた。地上にのみ留まらないということ、そして天上にのみ留まらないということが大切だ。

地上界と天上界という二つの世界の中に自己を規定するというよりも、この虹の中に自己を規定してしまうのはどうだろうか、というような思いが湧き上がってきた。そのようなことを考えていると、虹はどこかに消えてしまい、シロナガスクジラのような雲が、大海を彷彿させる青空をゆっくりと泳いでいるのに気づいた。

先日、偶然ながら私が長らく師事をしていたオットー・ラスキー博士から連絡を受けた。ラスキー博士と私は今でも定期的にやり取りをしており、今回は彼から新しい論文を贈ってもらった。論文のタイトルは“*How Roy Bhaskar expanded and deepened the notion of adult cognitive development: A succinct history of the dialectical thought form framework (DTF)*”である。

この論文は、近々Integral Leadership Reviewから出版されるそうだ。この論文を読むと、近年のラスキー博士は多様な発達領域において特に認知的発達に強い関心を持っていることがわかる。実際にラスキー博士が述べていたように、彼の関心事項は、成人発達において私たちの思考形態がどのような種類を持ち、それらが質的にどのような変容を遂げるのかにあるのだ。

ラスキー博士が構造的発達心理学の領域に果たしている貢献は、ヘーゲルやロイ・バスカーなどの哲学者が提唱する「弁証法思考」の特性を誰よりも深く探究し、哲学の領域で議論されている人間の思考特性を構造的発達心理学の枠組みから捉え直していることにあると思う。

「弁証法思考」と一口に言っても、ラスキー博士は28個の弁証法思考の形態を提唱しており、数年前にラスキー博士の下で学んでいた時、それらを一つ一つ理解することは非常に難しかったと記憶している。ラスキー博士が独自の視点から成人発達理論に新たな知見を加えていることを否定する者はいないだろう。

しかし非常に残念なのは、ラスキー博士の仕事は多くの発達心理学者からあまり注目されていないということである。ラスキー博士が提唱する認知的発達モデルには哲学的な観点が多数盛り込まれており、その理論モデルが難解だということに一因があるだろう。

さらに私は直感的に、ラスキー博士の提唱する理論モデルがなぜ日の目を見ることがないのかも分かりつつあるようになってしまった。その点については、またどこかで言及することになるだろう。

80歳を迎えたラスキー博士は、今もなお執筆活動を続けている。ラスキー博士との付き合いを通じて、世間から仕事が正当に評価されるというのは、非常に難しいことなのだと思うされる。

虹が去り、雲が去った後の空を見ながらそのようなことを考えさせられた。2016/10/2

418. 変化の裸体

自分の存在がこのリアリティに充満している目には見えない非存在のものにぶつかり、衝撃のあまりにしばらく立ちすくむという体験の意味が少しずつ分かり始めてきた。この体験を一言で述べると、それは未来に生じる自分の変化をその場で先取りして経験することに他ならなかったのだ。

こうした気づきに至った背景には、どうも先日オットー・ラスキー博士から送ってもらった一本の論文の影響があるようだ。この論文の中でラスキー博士は、「批判的实在論 (critical realism)」を提唱したイギリスの哲学者ロイ・バスカー (1944-2014) の功績を構造的発達心理学の枠組みから捉え直すことを行っている。

バスカーの論文や書籍を読んでいると、確かに彼はピアジェの段階モデルで言うところの「形式的論理思考」の限界を哲学的な観点から見事に指摘している。そもそもバスカーは、人間の思考の限界や盲点について洞察に溢れる指摘を幾つもしている。

その中でもバスカーは、「存在論的一原子価 (ontological monovalence)」という言葉を用いながら、世界を単色で塗りつぶすこと、つまり形式的論理思考のような直線的な思考を用いてこの世界を把握しようとするものの限界を指摘している。

あるいは、世界を一つの観点から捉えようとする思考特性の危険性についてバスカーは警鐘を鳴らしていると言える。私が思うに、バスカーは世界を単一の視点で眺めることの危険性に加え、自分の視点を採用することによって浮き彫りにならなかった非存在のものを蔑ろにする傾向を危惧しているように思うのだ。

弁証法思考に関して考察を深めた偉大な哲学者——ヘーゲルやテオドール・アドルノなど——と同様に、ラスキー博士はそうしたリアリティに潜む非存在なもののことを「absence」あるいは「negativity」と呼んでいる。そうなのだ、私たちは何かを捉えたと思った瞬間に、それはこれまで非存在だったものが存在に変わったということが起こっているのと同時に、何かを捉えることによって、新たに非存在が生み出されるということが起こっているのだ。

非存在だったものを存在に変えた瞬間に、新たな非存在が生み出されるのである。これはさながら、財宝が入った箱に手を入れ、たくさんの財宝を掴んだことに有頂天になり、掴みきれなかった財宝がまだその箱の中に存在していることをすっかり忘れてしまうような状態である。

実際には、このリアリティは閉じられた箱ではなく、無限の意味が充満する世界であるため、掴んだと思われる事柄はこのリアリティの極めて微少なものに過ぎない。「自己探求や特定領域を探究することに終わりはない」と言われる背景にはこのような事情があるように思われる。

ここで取り上げようとしていたのは、探究活動の永続性についてではなかった。私が取り上げようとしていたのは、存在の影すら見えなかったものがどんどんと自分に飛び込んでくるという体験についてであった。これまでの私はどうも、何がリアルで何がリアルでないのかの線引き問題や、何が実在で何が非実在なのかの線引き問題に苦戦していたように思う。

この五年間において、就寝前に時折やってくる、自己の存在を極小の点に還元し、自己の存在に対して徹底的に疑義を挟むという経験と徹底的な疑義の先に存在する疑いのない自己を思い知らされるといった経験は、まさに自分がそれらの問題に対して苦戦していた表れだと思うのだ。

ほぼほぼ無関係に思われる観点かもしれないが、もしかするとこのリアリティは存在と非存在を超越したもので充満しているのかもしれない、という考えがそれらの問題を間接的に解く鍵になるかもし

れないと直感的に判断した。さらに、私たちの存在は、非存在のものに向かっていく衝動を内在的に持っており、それが変化を生み出すきっかけなのではないかと思う。

別の言い方をすれば、非存在が存在として姿を表すそのプロセスが変化の本質なのかもしれないということである。変化というのは、そもそもある状態からまだ見ぬ状態へ移行することだろう。そうであれば、やはり変化の本質は、このリアリティが内包している非存在の中にありそうだと考えることはできないだろうか。

「未来は現在の中にある」というバスカの発言はまさに、非存在は私たちの目には見えないところで常に存在しているという逆説的な特徴を示しているように思える。私が体験していたことはまさに、今というこの瞬間に無数に存在している非存在とぶつかることによって、生身の変化の本質に触れるということだったようだ。

往々にして、変化とは、変化をした後に気付くものであるが、このように現在進行中の変化の裸体と遭遇することは、私にとって、かなり衝撃的な体験だったのである。

419. サスキア・クネン教授との二回目のミーティング

今日の午前中は、論文アドバイザーのサスキア・クネン教授とのミーティングがあった。初回のミーティングから一週間が経ち、今日は私がドラフトした研究提案書について色々と助言をもらった。論文の大枠に関してはほぼ問題ないとのことであった。

ただし、研究方法の選択とリサーチクエスチョンに関する箇所は、もう少し説明を追加した方がいいとのことであった。クネン先生の指摘の通り、確かに論文の背景とリサーチクエスチョンとの間には少し飛躍があり、説明が少々足りないことに気づかされた。

今回の研究提案書は、800字という字数制限があるため、あまり事細かに説明することはできないのだが、それにしてもリサーチクエスチョンの箇所には、曖昧な点が幾つか残っていたように思う。特に、「なぜカート・フィッシャーのダイナミックスキル理論を活用するのか?」「ある知識領域において、成人学習者が書き言葉で発揮するポテンシャルレベルが学習プロセスの形に影響を与えうるかもしれないということが、どうして重要なのか?」「この研究では、『受動的な学習者』と『能動的な学習

者』をどのように定義しているのか？」「成人学習における教師の役割とは一体どのようなものであり、この研究で想定しているインタラクションの種類にはどのようなものがあるか？」などをより明確にしておく必要がある。

提案書の大枠に関してクネン先生と意見交換をした後に、理論モデルを構築することの意義と定性的研究手法の進め方に関して助言をもらった。今回の研究で用いるデータは量的にはかなり多く、データを眺めることから研究を始めてしまうとあまりにも時間を食うため、まずは自分なりの理論モデルを構築することを勧められた。

理論モデルを構築することによって、データの着目箇所がより鮮明になる。仮にデータから理論モデルに反するようなものが検出されても、それをユニークな発見事項として早期に理論モデルを修正していくことができる。研究の中にも要素間の動的な相互関係があり、データと理論モデルはお互いに影響を与え合いながら研究が徐々に深まっていくのである。

「理論モデルの構築」と言うと少し仰々しいのだが、自分の研究仮説をもとに、変数間の関係性を考え、小さな理論を組み立てるようなイメージである。「理論モデル」という言葉に尻込みをする必要はなく、暫定的なモデルを組み立て、研究の進行に応じて徐々にそれを洗練化させていきたい。

次に話題となったのは定性的研究手法についてである。今回の研究は数式モデルを構築する前に、定性的研究手法を活用することが求められる。ここでより調査をした方がいいと勧められたのは、「グラウンデッド・セオリー (grounded theory)」と呼ばれる定性的調査手法である。

偶然ながら、日本にいた時に、グラウンデッド・セオリーの提唱者バーニー・グレイザーとアンセルム・ストラウスの著書“The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research (1999)”を購入して、どのような調査手法なのか少しばかり調べていたことがあったのだ。

確か当時は、コンサルティングやコーチングの仕事を通じて得られたデータから、どのようにして自分独自の理論を構築していけばいいのかを探求していた時期だったと記憶している。当時の記憶をもとにすると、グラウンデッド・セオリーとは、既存の理論モデルから研究を進めるのではなく、まずはリサーチクエスチョンを立て、定性的データに見られる特徴的な要素をコード化し、コードに対し

て概念やカテゴリーを割り当てていくような手法だったと思う。今のところそのような理解しかないため、クネン先生の助言に従い、いくつか関連文献に当たってみようと思う。

ミーティングの最後に、正式にスーパーバイザー契約を書面で取り交わし、ミーティングの頻度や研究の中間報告の時期、そして論文の提出日などを決定した。帰り際、研究者として生涯に扱える研究テーマやプロジェクトの数はごく限られたものにしかなりえないことを悟り、一つ一つのプロジェクトと真剣に向き合っていきたいと思った。

そのような姿勢を持って仕事を続けていくこと以外に、研究者としての成長はないように思われた。

420. 今後のオランダ語の学習について

早朝、オランダ語のクラスへ向かう途中、いつもとは違う道を通っていこうと思い立った。工事が佳境を迎えたクラネヴェ通りではなく、何気なく一つの横の道を通って行くことにした。振り返ってみても、自分がどうしてそのような意思決定をしたのかわからない。

いつもと違う道を通ることによって、自分の気持ちを新鮮なものにしたかったのかもしれない。道を変えてみたところ、クラネヴェ通りとはまた違う景色がそこに広がっていた。クラネヴェ通りのように大通りではなく、このようにこじんまりとした道の方がヨーロッパの香りが立ち込めている気がした。

道を変えてみて正解だったのは、案の定、自分の気持ちが新鮮なものとなり、オランダ語の学習に取り掛かる準備ができたと思った。普段歩いている道を変えてみるというのは面白いもので、新たな発見や気づきと共に、自分の内側の変化を促すような触媒がそこに転がっている可能性があるのだ。フローニンゲンでの暮らしにも慣れ、少しばかり変化を取り入れたい時期に私はいるのかもしれない。

語学センターに到着すると、まだ開いていないクラスの前で、アイルランド人のドーナ、イタリア人のファブリツィオ、中国人のシェン、インドネシア人のレニーが何やら雑談をしているのが見えた。彼らに挨拶を済ませ、雑談の輪に加わると、どうやら来期のオランダ語コースについて話し合っていることがわかった。

今回私たちが履修している最も初級のコースは、平日のほぼ全ての曜日の様々な時間帯に開講されている。しかしながら、次のレベルのコースは、開講される曜日が限定的であることに加え、時間帯が夕方か夜しないのだ。その点について、午前中に学習することが都合の良い私たちは少し不満があった。

私は完全に朝型であり、集中力を要する仕事や学習は午前中に取り掛かることを習慣にしているため、来期のオランダ語のコースを履修するかどうか迷っている。来期は、論文のアドバイザーを務めるサスキア・クネン教授のダイナミックシステム理論に関するコースを受講し、このテーマに絞って探究を進めようと思っているし、一つ新たな仕事を始めようと思っている。そのため、来期中はオランダ語のテキストを独学で進めていくことになるかもしれない。

そうしたことを考えながら、本日のクラスが始まった。今日は主に、先日行われた中間試験の解説と形容詞の変化のさせ方がテーマであった。返却された中間試験の結果は上々であり、ディクテーションに関しては今後より入念な準備をしておく必要があると思った。

初級のオランダ語のコースも残すところあとわずかである。コースを受講する前と今の自分を比べてみると、自分の中でオランダ語の世界が格段に広がっていることに気づき、進歩を実感している。仮に、来期次のレベルのコースを受講しなかったとしても、着実に自分のペースでテキストを進めていきたい。

外国語というのは継続的に学習をして初めて徐々に身につくものであるため、今回せっかくオランダ語の基礎を作ったので、その土台を確固とするために継続的な学習を自らに課そうと思う。

先日行われたクネン先生とのミーティングの最中、今の私に参考になる文献があるが、それがオランダ語であるためにクネン教授は私にその書籍を勧めなかった、という出来事があった。こうしたことから、私がオランダ語の読解力を高めれば、英語ではアクセスできない知の世界に入っていけると思わされた。

今回のオランダ語のコースの受講前は、オランダ語という言語世界は完全に未知なるものとして私の目の前に立ちただかっていたが、今は少しずつ未知なる世界が既知なる世界に変わりつつある

のを実感している。そして言語世界のみならず、オランダ語の世界が開拓されていけばいくほど、私の内側の世界の中で未知だった領域が既知へと変わりつつあることを認識している。

学習や発達の本質は、確かに「未知から既知へ」という現象に裏打ちされているようだ。